

2R 行動開始のきっかけと要因 レジ袋削減行動を中心として

環境デザイン学科 住環境学専攻 山川研究室 瓜野友子

1. 背景と目的

近年、循環型社会の形成が大きな課題となり、2R 行動(発生抑制・再使用)が叫ばれるようになった。しかし3R 行動や環境問題への関心は人によって異なる。そして、環境に配慮して行動を行っている人は一部の人間にとどまっている。この違いが生じる原因として、日常の中で個人が触れる環境情報の量や質が考えられるのではない。またそうした情報に触れる機会のほか、行動を始めるきっかけになることに会うか否かが影響しているのではないだろうか。

現在までに、西尾の研究¹⁾などにおいて、どのような要因によって人は環境配慮行動を取るのかについて明らかにされてきた。しかし、知識・情報の効果については必ずしも詳細に検討されていない。また、どのようにして行動を始めるきっかけを持つのかという点に関しても明らかにされていない。

そこで本研究では、2R 行動を始めるきっかけを明らかにするとともに、知識・情報が2R 行動を進める上でどのように影響するかを明らかにすることを目的とする。

2. 3R 行動を始めるとき～1対1インタビューに基づく分析

2.1 調査概要

インタビュー調査では、3R 行動がどのようなきっかけで、どのような意識の変化を伴って始めるのかについて検討したが、ここでは2R 行動の結果を中心に示す。調査は1対1のインタビュー形式で行った。調査対象者は8名の男女で、全て大学生である。

インタビューの内容は、まず対象者が現在行っている、またはできていない環境配慮行動を聞き、その行動を始める以前から現在までのプロセスを探る。

2.2 事例的分析

ここでは紙面の都合で1名の調査結果について示す。この事例は一人暮らしの女性の例である。この対象者からマイバッグの持参が挙げられた。この行動のきっかけと考えられるのは、レジ袋の有料化である。しかし、店舗によって有料化の導入にはバラつきがあるため、常にマイバッグを持参するという後押しが弱いようである。また、持ち歩くのが面倒だというコスト評価も挙げられた。この対象者のほかにもマイバッグを使用している人は2名いたが、影響している要因としてはほぼ同じと考えられる。

2.3 インタビューにみる2R 行動のきっかけと要因

以上の事例を含めたインタビュー調査によって挙げられたきっかけ、関係する意識を、行動のタイプ別に表1

に示す。

表1 環境配慮行動ときっかけ・要因

行動の種類	きっかけ	要因
詰め替え商品の選択	<ul style="list-style-type: none"> 一人暮らし 自分でゴミ出し 詰め替え商品が売っている 詰め替えの方が安い 詰め替えの存在を知っている 	<ul style="list-style-type: none"> 生活環境の変化 社会規範評価 責任帰属性認知 有効性評価 実行可能性評価 情報を得る コスト評価 環境リスク認知 ベネフィット評価
マイバッグ持参	<ul style="list-style-type: none"> 行動の認知 大学の授業 レジ袋有料化 	<ul style="list-style-type: none"> 環境リスク認知 ベネフィット評価
マイ箸持参	<ul style="list-style-type: none"> マイ箸持参特典のある店を知る 	<ul style="list-style-type: none"> 実行可能性評価
ペットボトル再使用	<ul style="list-style-type: none"> 一人暮らし 自分でゴミを出す 他の人のゴミを見る 	<ul style="list-style-type: none"> 生活環境の変化 コスト評価 責任帰属性意識 対処有効性評価 環境リスク認知 社会規範評価 有効性評価

要因の多くは、西尾¹⁾や広瀬²⁾が挙げている要因とほぼ同様であり、2R 行動においてもこれらの要因モデルが適用できる可能性が高いと考えられた。そこで次節では、これらのモデルと上記結果に基づいて有効性評価と情報の関係について検討する。また上記で挙げられたきっかけが、どの程度一般的かについても検討する。

3. 2R 行動開始のきっかけと知識・情報の影響

3.1 調査概要

一般市民における2R 行動開始のきっかけ・行動の影響要因を検討するため、インターネット調査による質問紙調査を行った。調査概要を表2に示す。本研究では、そのうち京都市在住者以外で学生以外の700サンプル()を用いて分析を行った。では性別・年齢・職業に基づく36層について労働力調査2007の全国地に基づき比例割当を行い、モニターの属性の偏りを補正した。分析対象とした2R 行動はレジ袋削減行動である。なお本調査は、京都大学環境保全センターとの共同調査である。

表2 インターネット調査概要

調査期間	2009年01月18日～2009年01月22日
調査対象	ボイスポート、および、Yahoo!リサーチ・モニターのモニター
回収サンプル数	京都市民(200)、学生(400)、それ以外の市民(700)

告知メール 発送	層別全国値比例割当、期待回収率補正に基づく無作為抽出。 計 32,822 に発送。
標本抽出 方法	予備調査に基づく層別先着締切方式
回収数 (回収率)	予備調査 : 8,852 (回収率 27.0%) 本調査 : 1,999 (依頼数: 2,211、回答率 90.4%) 全体 : 1,300 (4.0%)

3.2 2R 行動のきっかけ

レジ袋を断るようになった主なきっかけについての回答結果を図1に示す。回答は択一式である。

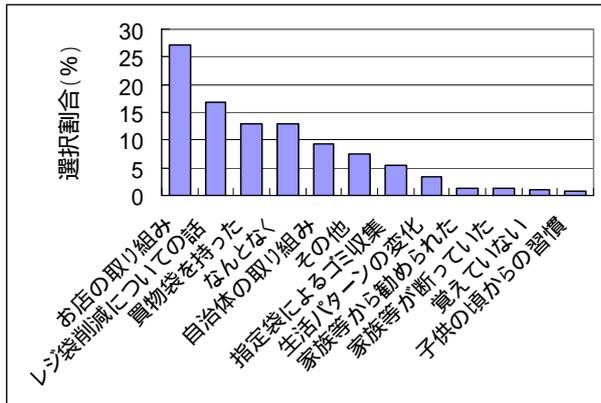


図1 レジ袋を断るようになったきっかけ

この結果より、最も多くの回答者が選んだきっかけは「お店の取り組み」である。次いで「レジ袋削減についての話を聞いた」「買物袋を持った」という順であった。インタビュー調査でも、マイバッグ持参のきっかけとしてレジ袋の有料化が多かったが、この点はネット調査の結果と一致する。レジ袋削減という行動に関しては、買物をする人が対象であるため、やはり実際に買物をする、まさにその場所での情報が最も効果を表すのではないかと考えられる。

3.3 行動の要因分析と考察

インタビュー結果と既存研究に基づき要因モデルを作成し、影響要因の分析を行った。図2に分析結果を示す。分析はレジ袋削減行動、行動意図、有効性評価、確かな情報を従属変数とし、それぞれSTEPWISE法による変数選択式重回帰分析を適用することにより行った。「確かな情報」の分析では、図中、この変数より下で、有効性評価より左に位置する変数を独立変数とした。それ以外は各従属変数より左に位置するすべての変数を独立変数とした。図では危険率1%未満で有意となった関係のみを示している。なお、「ごみ袋として再使用」「実行可能性評価」「レジ袋コスト評価」「レジ袋有料化評価」の係数は質問文の関係で符号を反転して読み取る。

まず、「レジ袋削減行動」「行動意図」の要因については、ほぼ仮説通りの結果が得られた。そこで、有効性評価と情報の関係について検討する。

「有効性評価」へは「確かな情報」のほか、「環境情報

入手ルート」のうちの「新聞・雑誌記事」「スーパーマーケットなどの地域の流通業者」から有意な影響があった。「環境情報入手ルート」の各変数間の相関は高いため、個別の解釈は困難だが、これらの情報源が有意に影響していた背景には環境問題への関心の高さが反映されているのではないかと考えられる。

さらに「確かな環境情報」と情報接触との関係を検討したところ、複数の「環境情報入手ルート」からの影響があった。中でも「生協活動・ボランティア活動」の影響が大きい。ここでも環境への関心が高い人が、確かな環境情報をより保有していることを示しているのではないかと考えられる。一方、社会的情報接触やレジ袋情報への接触頻度は危険率1%では有意な影響が見られなかった。これは、日常的に情報を多く得ている人は環境情報以外の情報も多くなるために影響力が低下するのではないだろうか。

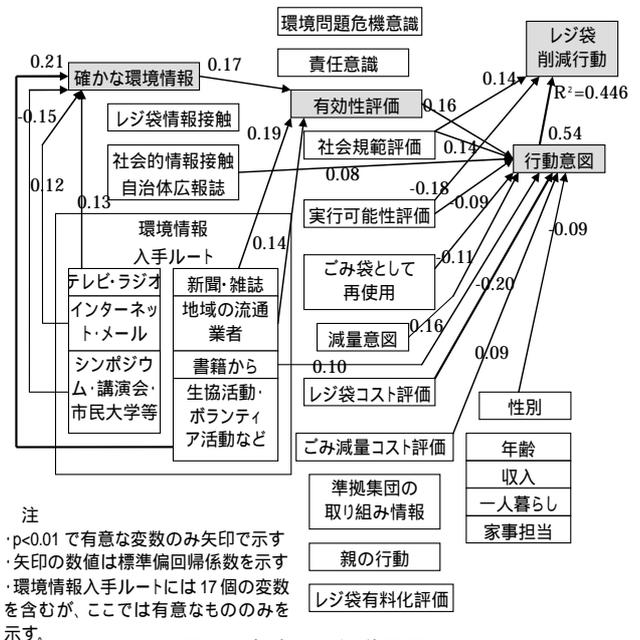


図2 一般市民の行動要因

4. 結論

本研究で得られた結論は以下のとおりである。

- ・一般市民のレジ袋削減行動を始めるきっかけとしては、「お店の取り組み」を挙げる人が多い。
- ・一般市民のレジ袋削減行動に、既存モデルが適用可能であった。
- ・確かな環境情報には、有効性評価を高める効果がある。
- ・レジ袋情報や社会的情報への接触頻度は、有効性評価にも確かな環境情報の取得にも影響していないが、環境情報の入手ルートは影響する。

1) 西尾チツル「消費者のごみ減量行動の規定要因」消費者行動研究, Vol.11, No.1.2, pp.1-8, 2005年

2) 広瀬幸雄(1994) 環境配慮的行動の規定因について。社会心理学研究, 10, 44-55